JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

10

2024
OCTOBER

地方の村でのサマーキャンプ。お別れの時、帰らせない！
と子どもたちが抱きついてきました（セネガル）

特集

先輩隊員の活動に学ぼう
赴任後のお悩み解消法

派遣国の横顔［キルギス］
旧ソ連の面影が残る、日本に好意的な国

JICA海外協力隊派遣現況

2024年8月末現在

現在の派遣国数
74カ国

アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	25	2
エチオピア	11	
ガーナ	55	1
ガボン	11	1
カメルーン	11	
ケニア	43	1
ザンビア	29	1
ジブチ	13	
ジンバブエ	11	
セネガル	33	
タンザニア	25	
ナミビア	11	
ベナン	34	
ボツワナ	28	3
マダガスカル	22	
マラウイ	42	
南アフリカ共和国	5	
モザンビーク	33	1
ルワンダ	27	

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	19	
インドネシア	38	
ウズベキスタン	17	1
カンボジア	29	
キルギス	32	
ジョージア	8	1
スリランカ	24	
タイ	23	5
タジキスタン		2
ネパール	10	3
バングラデシュ	3	
東ティモール	24	
フィリピン	7	
ブータン	22	4
ベトナム	45	
マレーシア	22	3
モルディブ	3	
モンゴル	41	5
ラオス	33	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	7	
ソロモン	17	1
トンガ	13	1
バヌアツ	15	
パプアニューギニア	10	
パラオ	25	2
フィジー	18	3
マーシャル	7	3
ミクロネシア	9	2

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	8	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	26	
チュニジア	11	2
モロッコ	39	1
ヨルダン	21	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		7	6	2
ウルグアイ		8		
エクアドル	30	3		
エルサルバドル	23			
キューバ		1		
グアテマラ	26			
コスタリカ	18			
コロンビア	16	5		
ジャマイカ	11			
セントルシア	17			
チリ	9	2		
ドミニカ共和国	14	1	6	
ニカラグア	18			
パナマ	15	2		
パラグアイ	27	3	9	1
ブラジル			57	2
ベリーズ	14			
ペルー	40	1		
ボリビア	39	1	1	
ホンジュラス	33			
メキシコ	19	11		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	1,465 （600／865）	96 （76／20）	79 （33／46）	5 （2／3）	1,645 （711／934）
累計 （男性／女性）	48,053 （25,254／22,799）	6,712 （5,420／1,292）	1,645 （638／1,007）	555 （256／299）	56,965 （31,568／25,397）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊　（単位：人）

COLUMN ― 表紙によせて

私たち教育系隊員と現地のNPOで一緒に企画運営した、青少年向けのサマーキャンプの一コマです。普段の学校生活ではあまりできない図工やダンス、スポーツなどのアクティビティを通じ、子どもたちが個性を発揮しながら一つの目標に向けて協力・成長できるよう工夫しました。2週間という短い期間ながら充実したイベントでした。
左近浩太郎（旧姓 山本）さん（セネガル／小学校教育／2016年度1次隊・山口県出身）

JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード
CROSSROADS

10
2024
OCTOBER

CONTENTS

2　JICA海外協力隊派遣現況
3　CONTENTS／索引
4　知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔［キルギス］
8　［特集］
先輩隊員の活動に学ぼう
赴任後のお悩み解消法
16　スキルや意欲で道を開く
就職ストーリー
18　派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元
20　お悩み相談
アドバイスを聞きました！
21　INFORMATION
―JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ
22　あの日、地球の、あの場所で。
23　隊員めし ―任地の食生活に彩りを！
24　公開！ 私の派遣国生活［エクアドル］

国別索引

	掲載ページ
エクアドル	24
ガボン	9
キルギス	5、6、7
ケニア	4
スーダン	22
スリランカ	12
セネガル	1
タンザニア	20
パラオ	23
ボツワナ	23
ボリビア	14、18
ラオス	16

職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	5
村落開発普及員	4
在庫管理	20
野菜栽培	9
マーケティング	24
青少年活動	18
環境教育	12、22
陸上競技	6
理科教育	16
小学校教育	1、14
デザイン	23
障害児・者支援	7

出身都道府県別索引

	掲載ページ
青森県	9
福島県	6
茨城県	24
東京都	23
神奈川県	5、16、20、22
大阪府	12
島根県	4
山口県	1
熊本県	18
沖縄県	7、14

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2024年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

派遣国の横顔〈キルギス〉

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから

Profile of the partner country of JOCV

遊牧民文化やソ連時代の建築物が残り、異文化が感じられる一方、人々の外見は日本人に似ていて親近感を持てる国。

Text＝工藤美和　写真提供＝ご協力いただいた各位

キルギス共和国
Kyrgyz Republic

キルギスの基礎知識

面積：19万8,500平方キロメートル（日本の約半分）
人口：670万人（2023年、国連人口基金）
首都：ビシュケク
民族：キルギス系（73.8%）、ウズベク系（14.8%）、ロシア系（5.1%）、ドゥンガン系（1.1%）、ウイグル系（0.9%）、タジク系（0.9%）、その他タタール系、ウクライナ系など（2021年、キルギス共和国統計委員会）
言語：キルギス語が国語（ロシア語は公用語）
宗教：主としてイスラム教スンニ派

※2023年12月21日現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kyrgyz/index.html

派遣実績

派遣取極締結日：1998年7月15日
派遣取極締結地：ビシュケク
派遣開始：2000年8月
派遣隊員累計：314人

※2024年7月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）

お話を伺ったのは

永瀬 光（ながせ ひかる）さん
（ケニア／村落開発普及員／2013年度1次隊・島根県出身）
JICAキルギス事務所・企画調査員（ボランティア事業）。東日本大震災の際に受けた海外からの支援に恩返しがしたいと協力隊に応募。警察を退職して2013年、ケニアに赴任。15年に帰国してからは、二本松青年海外協力隊訓練所勤務、ベトナム事務所での企画調査員（ボランティア事業）を経て、22年からキルギス事務所に勤務。

キルギスへの協力隊派遣は2000年に4名の派遣から始まりました。当初はスポーツ、日本語教育、IT技術分野が中心で、その後、村落開発や障害者支援、観光にも分野を拡大し、これまで50種類以上の職種で累計300名以上が活躍しています。

14年に中低所得国の仲間入りをしたものの、特に地方を中心に貧困から抜け出せておらず、国際支援やロシアへの出稼ぎ労働者からの収入に頼っています。JICAは06年から、特産品を作って地域振興を図る「一村一品運動」の展開を支援し、22年には国家プロジェクトに採択されるまでになりました。協力隊員も連携し、各地の生産者団体で活動してきた歴史があります。

近年は、教育・青少年育成分野の隊員が半数近くを占め、小学校教育や英語教育に携わっています。特にグローバル化の進展を受け、キルギス政府が教育の国際化・多言語化を進める中、隊員は日本での経験を生かして英語教員の指導技術向上や生徒への直接指導を行っています。

ビシュケク郊外にあるアラアルチャ国立公園は、氷河から流れてくる川や豊かな緑が美しい。首都のすぐ近くでも4000メートル級の山々によるダイナミックな山岳風景や観光が楽しめることはキルギスの魅力の一つ

ソ連時代には首都を中心にインフラ整備が進みましたが、地方のインフラ整備はまだまだ不十分です。特に教育や社会福祉は立ち遅れており、教育系以外にも、産業人材の育成支援や保健医療・福祉分野への支援に関する案件形成にも力を入れています。

キルギス人は日本人と外見がとても似ているため、隊員も現地になじみやすく、治安も比較的安定していますし、市場には肉や野菜など多くの食材が並び、暮らしやすい国です。山岳国として登山やスキー、遊牧民文化を伝える乗馬などのアクティビティも盛んです。

キルギス語とロシア語二つの言語が使われていることから、コミュニケーション面での苦労もありますが、隊員には、現場に飛び込んで自分の目で観察し、良いと思うことに挑戦してほしいと思います。

キルギスに秘められた力を開花させた隊員たちの活躍

朝山琴美（あさやまことみ）さん
コミュニティ開発／
2013年度2次隊・神奈川県出身

PROFILE
旅行で各国を回る中で現地の人たちが参画できるツーリズムに興味を持つ。大学卒業後、旅行会社に就職。協力隊任期終了後の翌2016年にキルギスに戻り、旅行会社Nippon Hospitality Tabi Company LLCを設立。旅行業のほか教育サービス事業も展開。22年からはJICAの地域開発・観光促進プロジェクトの専門家も務めている。

一村一品運動の生産者が参画する体験型観光プログラムを軌道に

キルギスでは、地域素材を使った特産品を作ることで地域活性化とコミュニティ振興を図ろうと、2006年にJICAの協力による一村一品（One Village One Product・以下、OVOP）プロジェクトがスタートした。生産者団体を支援する協力隊員も派遣され、伝統的な手仕事による羊毛フェルト製品や蜂蜜、塩などの商品化に成功した。OVOPはキルギスの国家プロジェクトに採択され、全国展開が進められている。

OVOPに観光の側面から関わったのが、13年にコミュニティ開発隊員として派遣された朝山琴美さんだ。キルギスにはそれまで存在しなかった、生産者が観光客を受け入れる体験型ツーリズムのプログラムを作った。

朝山さんが活動したのは、風光明媚（めいび）で避暑地として知られるイシククリ湖の南岸地域の生産者団体。北岸はリゾート地として開発され、海外から観光客が多く訪れる。一方で、南岸はアクセスなどの問題から開発が進まず、農業にも厳しい土壌だが、朝山さんの目から見れば、「夏の期間だけ遊牧生活をする人が住み、木とフェルトで作られた伝統式住居で有名な村もあります。素朴な雰囲気があって、キルギス人の生活に触れるプログラムに向いていると思いました」。

朝山さんは生産者団体を訪ね、体験型ツーリズムについて理解してもらうことから始めた。「遠出をするのは親戚に会う時くらい」と旅行になじみがない生産者にとって、海外からの観光客を受け入れ、フェルト作りを教え、そのサービスで収入を得るというイメージを持つことは難しく、「商品を売って対価をもらえばいい」という反応が多かった。

朝山さんはフェルトでコースターを作るプログラムを考え、興味を示した7団体を対象に、外国人観光客に慣れること、プログラムを段取りに沿って行うこと、観光客へのコースター作りの教え方などについて、配属先のNGO一村一品組合や他隊員の協力を得てシミュレーションを重ねた。

観光客を受け入れてみると、最初こそ自分が作ってしまいそうな勢いの生産者たちだったが、回数を重ねて教え方も上達し、日本やアメリカ、フランス、スペインなどから来た人々が一緒にお茶を飲んでおしゃべりをし、自分たちの伝統文化や生活に興味を示してくれることを喜んだ。商品を売らなくても観光客を受け入れれば収入になることを理解し、もっと良いプログラムにしようと朝山さんにアドバイスを求めたり、観光客が来ることを楽しみにするようになった。

朝山さんは生産者団体と共に、ビシュケクの旅行会社を訪ねて営業活動も行った。村からほとんど出ることがない生産者の女性たちにとって首都のオフィスへの訪問は敷居が高いが、それでも自分たちのプログラムに自信を持って説明した。「熱意を持って紹介する姿が今も目に浮かびます」。

活動2年目には、観光客や旅行会社からのリクエストを受け、生産者家庭での伝統料理作り体験や、職人による大きなフェルト絨毯（じゅうたん）の制作実演なども行った。また、旅行会社と生産者団体を結ぶ窓口を配属先に設け、朝山さんの帰国後も受け入れが続けられるようにした。それでも「やり残した気持ちが大きかったんです」という朝山さんは、任期終了後にビシュケクで起業し、世話になった生産者団体と日本の観光客をつなぐ事業を展開している。

体験型ツーリズムのプログラム作成のため、生産者たちと羊毛フェルトを使った伝統的な特産品作りを教えるシミュレーションをする朝山さん（後列右端）

諦めやすい選手の意識を改革して東京五輪へ導いた元箱根駅伝選手

大学時代に箱根駅伝に2回出場するという夢をかなえた髙橋賢人さんは、多くの人から支えてもらった競技経験を還元したいと協力隊に参加、2018年にキルギスに派遣された。主な要請は2年後に控えた東京2020オリンピックを目指す長距離選手の育成と強化だった。

しかし、配属先であるキルギスアスリート連盟と陸上競

髙橋賢人（たかはしけんと）さん

陸上競技／2017年度3次隊・福島県出身

PROFILE

高校から陸上を始め、大東文化大学在学中、箱根駅伝に2回出場。卒業後、製薬会社、福島県庁に勤務。協力隊ではキルギス陸上界の発展に貢献したとして、日本人初となる個人への勲章をキルギス政府より授与された。2021年にはキルギスオリンピック委員会副会長顧問として東京五輪出場選手に帯同。現在、私立会津若松ザベリオ学園教諭。

技分野の各協会や学校との連携がうまくいっておらず、活動先が見つからない。トップチームに売り込みに行っても、コーチは足りているとか、外国人ボランティアは国外遠征のたびに所属先の承諾が必要で足手まといだ、と拒否された。

悩んだ髙橋さんは陸上競技場に通い、トラックをひたすら一人で走り、負荷の大きい練習をする日々を続けた。すると、その能力を見て驚いた人たちが声をかけてくるようになった。3カ月ほどたった頃、マラソン協会のコーチで小学生から社会人まで十数人に指導している監督と知り合い意気投合、そのチームで教えることになった。監督は海外の大会出場を目指す選手のトレーニングを一任してくれた。

キルギスでは「走るのは馬や羊」とされて、長距離走という競技を知らない人すらいる。指導を始めてみると、選手が「練習はきつくて疲れる」と嫌がり、目標もなく、すぐ諦めてしまう。髙橋さんは、「また練習に来たい」と思ってもらうことから始めようと、覚えたてのロシア語で、「嫌ならやめてもいい。でも今日の練習を始めたなら最後までやってみよう」と日々の練習を諦めないよう働きかけた。

さらに、選手に自主性を持ってもらおうと、ワンパターンだったトレーニングの内容を変えた。例えば、街中の舗装の悪いデコボコ道を走ったり、山道を走ったりとコースを変えることは同じ筋肉に疲労をためない目的があると教え、「今日はどっちの練習をすればいいと思う？」と選手に考えさせた。食事を含めて多くの時間を共にし、体づくりに対する意識も変えていった。

「走る楽しさと諦めないことの大切さを伝えたい」という目標を持ち、選手たちと共に走る髙橋さん

「ケントと走るのは楽しい」。チームがそんな雰囲気になった頃、「親が練習に行かせてくれない」と一人の選手が助けを求めてきた。家で作ったトマトを路上で売る仕事をしている少年だった。陸上などやっている余裕はないと親に殴られたが、それでも続けたいと泣きながら訴えてきた。髙橋さんはすぐ親の職場に行き、頭を下げて懇願し練習参加の許可を得た。

その少年は他の選手が利用する乗り合いタクシーに乗ることも難しく、どうすればいいかチームで話し合った。彼と同じスタイルで通えばいいのではという意見が出て、「私は彼と同じように練習場まで歩く」と髙橋さんが言うと、「私も」と全員が賛同。それぞれが歩いたり走ったりして練習場に通った。髙橋さんは住まいから片道約3.5キロの道のりを任期終了まで1年以上徒歩で通った。互いが精神的な支えとなり、選手たちは大寒波の時でさえ練習を休まなかった。

髙橋さんは、同じシャツを着続けシューズも中古品を使い回す選手たちのために、大学の恩師やスポーツメーカー勤務の知人を通じて支援を仰いだり、キルギス代表のユニホームを製作したりするなど環境面からも後押しした。

選手たちは「もっと速くなりたい」と目標を明確にして切磋琢磨（せつさたくま）し、国際大会にも出場。アジア大会や中央アジア大会の優勝者も生まれた。東京2020オリンピックには3人の長距離選手が出場し、髙橋さんも選手団の一員として帯同した。「ケントと出会ったからここにいるんだ。ありがとう」「何を言ってるんだ、君の努力だよ」。選手とそんな言葉を交わせたことが髙橋さんには何よりも嬉しかったそうだ。

障害者雇用に携わった経験を生かし若い利用者たちの生活と業務を支援

キルギスの障害者を取り巻く環境は厳しく、障害者の社会参加が進んでいるとはいえない。そんな中、若年層の障害者支援に取り組んでいるのが2023年10月に着任した前濱風花さんだ。

配属先はソーシャルビレッジマナスという、障害者に生活の場を提供しリハビリや職業訓練を行っている施設。ビシュケクから車で1時間ほどのムラケ村に20年ほど前に設立されたNGOだ。20代を中心に24人の知的障害者が共同生活を行いながら、手工芸品制作や畜産、野菜栽培を行い、乳製品などはビシュケクで、手工芸品はインターネットなどを活用し、ドイツなどの海外に向けても販売している。

要請内容は、障害者の運動やレクリエーションプログラムを充実させること、スタッフの業務効率化に役立つ提案など。障害者の就学率が低いキルギスでは、読み書きの学習経験がないまま入所してきた人も多く、「自立につながる能力を身につけてほしい」と施設長からも依頼されている。

前濱さんは利用者に季節や曜日を教える際、絵カードや写真を見せて答えてもらい、それを繰り返して知識を定着させていく

前濱風花（まえはまふうか）さん

障害児・者支援／2023年度2次隊・沖縄県出身

PROFILE

大学で農業を専攻し、ラオスで卒業研究を行ったことで、途上国や国際協力に興味を持った。大学院では特別支援教育について研究し、卒業後は、障害者への就職支援に当たる障害者職業カウンセラーとして独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構に就職。8年勤めた後に協力隊に参加。

前濱さんは、午前中は入所者に個別に時間を設け、文字や数字、基礎的な算数、時計の見方や時間管理の仕方、カレンダーの読み方などを教えている。派遣前訓練では公用語のロシア語を学んだ前濱さんだが、入所者はキルギス語しか話せない人もいるため、前濱さん自身もキルギス語を学びながら教えている。日本人は外見がキルギス人とよく似ているといわれ、前濱さんも「日本人だと言うと驚かれますが、『キルギス人によく似ていて安心する』と言われるので、キルギス語を話せるようになりたいと思っています」。

前濱さんは入所者の文字や数字の覚え方に文化の違いを感じている。「日本では知的障害者に教える場合、絵や図など視覚を使って教えると効果的なことが多いのですが、遊牧民の口承文化の名残なのか、視覚で覚えるよりも、口頭で教える方がスムーズに覚えられる方が多い印象で、教えることの面白さを感じています」。

食事の前は、同席する人たちの健康や幸せを祈り、皆で「オーミン」と唱える。「つい忘れると入所者からたしなめられ、キルギス人がしきたりや共に生活する人との絆を大切にしていることに気づかされます」。

午後は商品として販売する絵はがきやクッションといった手工芸品作りをする入所者の支援などを行う。

「スタッフがついて丁寧に作業を支援していますが、納期に間に合わなくなることもあるので、もっとスムーズに作業できる環境にしたいと考えています」

配属先では、障害者支援を専門的に学んできたのは施設長とソーシャルワーカー的存在のカウンターパートだけで、そもそもスタッフ数が不足しているため、海外からのインターンにも効率よく活動してもらえるようにしたいという前濱さん。〝カギ〟となるのがアセスメントシートだ。

配属先には入所者それぞれの特性や能力について記録したアセスメントシートはあるものの、日本の障害者支援の現場で導入されている、細かい目標やその達成時期の設定、本人へのフィードバックなどがないという。

「集中して作業できる時間の長短や休憩時間の設定を個々の人により合った内容にしていくことや、『ここまでできたね』ときちんと本人を評価する場も設けたいと思っています」

そうした仕組みやツールを整備できれば、入所者は自分の生活や作業について具体的に意識し、モチベーションを持って行動できるようになり、スタッフも仕事がやりやすくなるはずだ。「日本のやり方を押しつけず、キルギスの文化に合う方法を提案していきたいと思っています」。

活動の舞台（裏）──キルギス人と日本人はきょうだい？

黒髪に黒い瞳、顔立ちもキルギス人に似ているため、隊員はよくキルギス語で声をかけられる。「日本人」と答えると、こんな話を聞かせてくれるという。

昔、ロシアの南方に、キルギス人の先祖も日本人の先祖も住んでいた。魚好きが日本に行って、肉好きがキルギスに行った──「キルギス人皆が知っている伝説で、『キルギス人と日本人はきょうだいだ』と言ってくれます」と朝山琴美さん。

もてなしは、やはり肉を使った料理。前濱風花さんは、麺の上に馬肉がのせられた「ベシュバルマック」というお祝いの席で出される伝統料理がおいしいと話す。「数百人が集まる盛大な結婚式を行うのは出身の沖縄に似ていますが、沖縄以上に歌や踊りが大好きで延々と続き、そのパワフルさに驚きます」。

日本語教室に通うキルギスの女性たちを対象に日本紹介イベントを行った際、違和感なく浴衣を着こなす人々と朝山さん

特集 先輩隊員の活動に学ぼう

赴任後のお悩み解消法

派遣前に要請内容を読み込み、現地の情報をよく勉強していても、
いざ赴任してみるとまったく予想していない現地事情に驚かされ、
時にはそれが活動の壁となってしまうこともあります。
今回は3人の先輩隊員に、自らが赴任時に直面した課題に
どのように取り組んだのか、実体験とアドバイスを教えていただきました。
地道に粘り続けたり、活動の目先を変えたり、
自分自身のマインドセットを変えたりと、さまざまなアプローチがあるので、
自分に合ったやり方を見つける参考にしてほしいと思います。

Text＝飯渕一樹（本誌）　写真提供＝ご協力いただいた各位

CASE 1

配属先の同僚に熱意がなく、自分がマンパワーに！

石山紗希（いしやまさき）さん
ガボン／野菜栽培／2012年度2次隊・青森県出身
大学まで青森県弘前市で過ごし、青年海外協力隊としてガボンへ赴任。異国での暮らしを経て、地元に戻って地域社会を盛り上げたいと考え、都内で地方創生分野の経験を積んで2018年に弘前市の地域おこし協力隊としてUターン。地域の課題解決などに取り組む「Next Commons Lab」弘前支部の現場コーディネーターとなり、22年にORANDO PLUSを設立。

お悩み

地方の農業局のスタッフと共に、地域の農家を対象として野菜栽培や苗作りの指導を行うという要請で赴任したものの、スタッフには技術・知識を積極的に学ぶ姿勢が見られず、巡回などの活動にもほとんど同行せず石山さんに丸ごと任せてしまう。しかも、地域には肝心の専業農家もいなかった。

地元・青森県の大学を卒業し、石山紗希さんが新卒でガボンへ赴任したのは2012年。石油の生産で経済的に恵まれてきたガボンだったが、生産量が減少傾向に転じるなど状況が変化しつつあり、政府が他の1次産業や観光業の開発を進めようとしている背景があった。派遣前の石山さんに知らされていた要請内容は、任地・カンゴの農業局で職員に向けて苗床や堆肥を作る指導を行うことや、地域住民に野菜栽培について教えることなどだった。しかし、実際に現地へ赴任してみると、事前に想定していたのとは異なる状況に戸惑った。

「配属されたカンゴ農業局の事務所には所長と秘書、そして展示圃場（ほじょう）などで畑仕事をするスタッフが2人いたのですが、求められた活動は『農業を活性化してほしい』という漠然としたもの。多忙な所長は一緒に活動することが難しく、スタッフたちが実質的な同僚となりましたが、彼らはあくまで仕事だから農業局に顔を出しているというスタンスで、新しい知識を学ぶことには消極的でした」

それどころか、石山さんが出勤して待っていてもスタッフたちが事務所に来なかったり、時には酔っぱらって来たりすることさえあった。「現地にはヤシ酒を造るシーズンがあって、特にその時期はみんな働きたがらないので大変でした」。

首都リーブルビルから100kmほど離れた地方に位置する任地・カンゴ市。漁業が盛んな一方、気候が農業に適さないこともあって農家は少なかった

ヤシ酒は自分たちで飲むほか現金収入にもなるため、1～2カ月間のシーズン中は多くの男性が作業に出てしまう

農業自体も盛んではない土地柄に困惑

もともと、この配属先への隊員派遣は、石山さんの先代隊員が任期中盤にニジェールからの振り替えで配属されて始まったので、まだ協力隊受け入れの歴史自体が浅く、配属先の人々の間でも協力隊員という存在への理解が乏しかった。しかもこの地域はもともと農業地域ではなく、散発的に焼き畑農業を行う人がいる程度。石油産業の恩恵で外貨が豊富だったガボンでは周辺国から輸入した野菜が多く流通していて、カンゴでも農業普及に対するニーズがあまり高くなかったのだ。現状で農業が盛んではないからこそ“農業の活性化”が求められているとはいえ、農業を仕事にする住民すら見当たらず、取っかかりがない状況だった。

「赴任して早々に、やることがない！誰に対して何をすればいいのか？と壁にぶつかってしまいました」

CASE 1

ひとまずは配属先の人たちに自分のことを知ってもらおうと、事務所にはきちんと足を運び、常駐するようにした石山さん。敷地内の展示圃場では常に何かしらの作物を育てて管理したり、牛ふんを使った土作りや堆肥作りにも取り組んだりした。そんな中で「自分はただのマンパワーではないか?」と悩み、真面目に職場に来ないことが多いスタッフたちにも頭を抱えながらも、「真剣な態度で話したり、怒ったり、泣いてみたり、それでもだめなら、黙々と働く姿を背中で見せようとしたりと、あらゆるアプローチを試みました（笑）」。

さらに、親身になってくれた事務所の秘書と話したり、スタッフや地域の友人・知人らと一緒に飲みに行ったりする中で、現地の人々の仕事観について聞くことができたのは意味があったと振り返る。

「私の目からは全然働いていないと思えても、当人の基準では仕事をしたと考えていることもあります。すると、私に文句を言われて『なぜ怒られるんだ!』と反感を持ってしまうことも。彼らの基準を理解するのは難しいのが正直なところでしたが、知ることで折り合いをつけることはできました。他者を完全に理解するのは無理だと認識した上で、それでもわかり合おうとする姿勢は大切だと思います」

それでもスタッフのモチベーション問題や任地の農業事情などは簡単に変わるものではなく、石山さんは試行錯誤の2年間を送ることになった。

活動先の学校の子どもたちと、菜園で育てたオゼイユと呼ばれる野菜

配属先外での活動を模索。小学校の菜園での栽培実習や病院の入院患者との野菜作りを実施

石山さんは配属先のスタッフたちへの働きかけと並行して、他に何かできることはないかと、自分の足で探して回った。

その中で見つかった活動先の一つが、任地の小学校だった。校長が熱意のある人物で、学校の生徒たちに、どのように自分たちの食べている野菜が育つかを知ってほしいという希望を持っていた。そこで校内のスペースを使って学校菜園を始め、オクラや落花生、ネリカ米などを生徒たちと一緒に栽培した。

「カンゴでは稲作が行われていないので、生徒たちは米がどのようにできるのか知りませんでした。落花生のように地中で実ができると思っていた子もいたのには驚かされましたが、実際に種もみを植えるところから育ててみることで、食育の観点から良い経験をさせられたと思います」

また、任期の途中からは、福祉系の隊員が活動している病院で、精神科と老人科の患者に向けたアクティビティとして敷地内で一緒に野菜を育てる活動も始めた。「首都近くの病院なので、時折出張していました。水や土を触るだけでも患者さんたちにとっては良い刺激になるそうで、認知症のお年寄りが昔の仕事を思い出したのか、収穫した野菜を並べて売るような動きを見せたりする場面もありました」。

育てたのはオクラなどの育てやすい野菜で、収穫した作物は病院食の食材として利用。本来の要請外ではあるものの、自身の知見を現地のために役立てる取り組みとなった。

野菜栽培の指導をする石山さんと精神科の患者

対策

お悩み解消の3つのポイント

1 誰に働きかけるか見直す
2 目新しいテーマを示す
3 諦めず粘り続けることも大切

ネリカ米の試験栽培では見事に稲穂が実った。「痩せた土地でも育つ丈夫な品種だったので、お試し程度の少ない収穫量とはいえ問題なく育ちました」

配属先の展示圃場の運営も続け、訪ねてくる地域の人への栽培方法の説明などを地道に実施

2年間を通じて、配属先でも何かを形にして示そうと、事務所敷地内の展示圃場で堆肥作りや野菜栽培をやってみせることは継続していた石山さん。結局、スタッフらと体系立てて一緒に活動することは最後まで難しかったものの、住民に野菜のことや栽培方法について説明する中で、住民に野菜の苗や種子を提供して家庭菜園造りなどを行う取り組みにつなげることができた。

「住民向けの家庭菜園普及などは、配属先の同僚たちと一緒にできるのが一番だったのですが、そこまでは実現できませんでした。とはいえ、『野菜を輸入に頼り切ってはいけないから家庭菜園をやりたい』などと話す、やる気のある住民が任地にもいることがわかりましたし、収穫した野菜を副収入につなげたという人もいたのはよかったです」

ガボンでは珍しい米の栽培デモンストレーションは、任地でも多くの注目を集めた

小学校の菜園で育てたネリカ米はもともと、石山さんがウガンダでネリカ米栽培研修を受講して、種もみも調達してきて実現したものだった。

「時々隊員向けにネリカ米栽培の研修が行われていたので、任地で提案できる取り組みのレパートリーになるのではないかと思って研修を受けました」

ガボン全体でも米の栽培は珍しいため、学校だけでなく配属先の展示圃場の一角でも栽培デモンストレーションを行ったほか、関心を持ってくれた住民の家でも栽培を試した。

「ガボンでは米は輸入されたものを買うのが普通なので、小学生に限らず、一般の大人でも実際に栽培の過程を見る機会はほぼありません。いずれの栽培場所もごく小規模で試験的なものでしたが、住民たちの興味を引き出すことができて、反応は上々だったと思います」

配属先の展示圃場にて、石山さんとスタッフたち

CASE 2

環境問題についての前提知識や文化的背景が違う

北 俊宏（きた としひろ）さん

スリランカ／環境教育／2013年度2次隊・大阪府出身

高校時代に開発途上国のごみ問題に興味を持つ。大学卒業後、廃棄物処理や資源リサイクル事業を手がけるDOWAエコシステムで5年間勤務。スリランカからの帰国後は、自然エンジニアリングで太陽光発電所建設のプロジェクトマネージャーなどを務める。

お悩み

環境教育隊員として一般家庭への生ごみコンポストの普及活動や、現地の人々に向けた環境啓発などに取り組んだ北さんだったが、そもそも日本人と同じような学校教育を受けておらず文化的背景も違う住民たちに対し、環境啓発のプレゼンで基本的と思われた言葉や表現が通じない状況に直面した。さらに、現地の社会階層に対する意識など、日本の感覚と乖離（かいり）した課題に葛藤することも多々あった。

北 俊宏さんが赴任したスリランカのキャンディ市は人口約12万人を擁する主要都市の一つで、日々大量のごみが一般家庭やホテルなどの観光施設から排出される一方、行政の処理能力が十分に追いついていない状況だった。要請内容は、市役所の廃棄物管理課でごみ分別の啓発や家庭での生ごみ堆肥化の推進、学校における環境啓発活動の普及といった、各種の環境教育活動を行うこと。もともと日本で廃棄物分野の知識や経験を積んでいた北さんは、赴任して現地の状況を知る中で、すでに同課が実施している学校などへの啓発活動をフォローアップするほか、新たに家庭用の生ごみコンポストを普及させることでごみの減量化を目指そうと活動の方向を定めた。

ただ、実際に地域住民や学校の子どもたちに向けた活動を始めると、思いがけない課題にも直面した。

「赴任当初、学校でのワークショップで話した内容がうまく伝わっていないとの感覚がありました。私はネイティブではないので語学の壁があるのは当然でしたが、それよりも、コミュニケーションを取る相手のことを何も知らずに話していることが問題でした。例えば、相手が何に対して笑ったり怒ったりするのか、相槌の取り方、どのような環境でどのような教育を受けてきたのかなど。それを理解してみると、たとえ辞書にある正しい言葉でも、相手の年齢や教育水準などよって伝わらなかったり、他により日常的な表現があったりするのだと、何回かワークショップを重ねるうちに気づきました」

例えば環境教育では、ごみが分解されるまでの期間を想像させたり、有機物・無機物などの基準で分別基準を考えさせたりする活動があるが、それには前提となる文化背景や教育水準を実施する側が事前に理解している必要がある。

市役所主催の住民向け環境啓発集会で話すカウンターパートと北さん。赴任して早々に、コミュニケーションの壁に気づかされた

「日本ならば理科の実験や家庭科の実習、各種情操教育などを通じて、自然科学や栄養学の知識を自然と身につける機会がありますが、まだ一方向の授業が多く座学中心のスリランカでは条件が全く異なります。ごみのポイ捨てがいけないという道徳も、日本では家庭のしつけや社会の仕組みの中で育って身につけるものなので、それらの前提を共有していない相手に言葉だけで説明しても、本当の意味では伝わらないのです」

その他に、現地社会の事情にまつわる葛藤を感じることもあった。「スリランカでは社会的な職業区別などの意識が根強く、ごみの清掃・回収は決まった役割の人の仕事と見なされています。隊員として草の根的に彼らを観察したり手伝おうともしましたが、配属先での私の立場は、専門性を持って清掃作業員を管理するスーパーバイザー的な位置づけでした。そんな私がごみ収集車に一緒に乗って現地を回ってみようとすると、周囲の職員たちにはあまり良しとされない雰囲気がありました」。

多くの途上国の例に漏れず、清掃員以外の人間が一緒にごみを拾うと清掃員の仕事を奪うことになると言われたこともあり、異文化の中で、外国からのボランティアとして難しい立場での活動となった。

対策

お悩み解消の3つのポイント

1. 前提の違いを理解して工夫する
2. 完成度が低くてもやってみる
3. 釈然としなくても文化を尊重しよう

学校での環境啓発ワークショップ。現地社会は役所や学校、家庭など各種の主体から成るので、一カ所にこもらず活動することも重要

不完全でもトライすることでプレゼン経験を積み、コミュニケーション力を改善

赴任早々、ワークショップなどの場で意思疎通の壁を感じた北さん。言語外のコミュニケーション能力も大切だと感じたが、非ネイティブの北さんにはすぐに身につけられるものではない。そこで選んだ方法は、不完全でもワークショップを積極的に行い、とにかく場数を踏むことだった。

「言葉以外の部分は体験しなければわからないことが多いので、とにかく経験を積もうと考えました。日本的な感覚ではしっかり計画を立てて良い仕事をしなければ！と思いがちですが、50％程度の完成度でも即興でトライし、徐々にやり方を修正することでワークショップの質自体も上がっていきました。PDCA（※）という考え方がありますが、これは言わばDDDPDCAですね」

※PDCA…Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）の4つのプロセスを繰り返すことで業務のクオリティ向上を目指す手法

ごみ収集をする作業員たち。身分・階級差別はなかったものの、職業による格差の壁を感じたという

生まれ育った社会の前提となる“仕組み”を捉えて現地社会に応用してみる

教育や社会道徳といった前提の食い違いは互いの文化に起因するので、簡単に解決することはできないだろう。そうした中で日本の考え方を伝えるには、「価値観を構成する“仕組み”を俯瞰することが重要です」と北さん。自分自身が幼少期にどんな場所で、何を学んだのか振り返り、なぜその考えが良いとされるのかを考える。

「まず自分の経験や日本のことを基礎的な要素にまで分解してみると、何となく当然の常識と捉えてきたことが、現地では当たり前でないことに改めて気づくことができるはずです。その上で現地の人に伝わりやすいことを提案すると、受け入れられやすくなると思います」

地域住民に向け、家庭用コンポストのワークショップを行う北さん

時には現地の文化・習慣に釈然としないことも。自分の立ち位置を時間軸で俯瞰することも一手

活動の中で感じたスリランカの社会的な職業区別などについては複雑な思いがあったものの、自分が何をすべきか、答えは見つからなかったと振り返る北さん。

「協力隊の2年間は、文化的背景まで理解して問題解決を図るには短い時間ですが、自分なりの答えを見出そうともがいて任期を全うしたことに満足感もありました。国際協力は長い年月にわたる事業でもあるので、無理に正解を求めず、自分が今どの立ち位置にいるのか時間軸を俯瞰して、現状を楽しむのも良いのではないでしょうか」

CASE 3

日系移住地の社会事情や独特な環境に戸惑う

伊波興穂（いはこうほ）さん
ボリビア／小学校教育／2015年度1次隊・沖縄県出身
教育大学の障害児教育教員養成課程を卒業後、沖縄県立支援学校や小学校で8年間、教壇に。現職教員特別参加制度を利用して青年海外協力隊に参加。帰国後は、県立沖縄盲学校を経て、2022年から県立沖縄ろう学校に勤務。

お悩み

ボリビアの日系移住地にある日系日本人学校に配属された伊波さん。日常生活も含めて日系社会で過ごす中で、昔ながらの日本らしさを強く意識した暮らしや、日系人ならではの事情に当初は戸惑うこともあった。また、狭いコミュニティゆえ、日本からやって来た伊波さんに注目が集まりがちな状況や、自身の振る舞いが“日本人らしさ”の手本として見られるという特殊な立場にも直面した。

ボリビア東部のサンタクルス県に位置するコロニア・オキナワ（以下、オキナワ）は、第2次世界大戦後に沖縄県出身の日系移民が開拓した町である。現在は非日系の住民もかなり増えているが、日系人団体などによる日本文化継承や日本語教育の取り組みが盛んで、日常会話や食生活、各種行事など、日系人の暮らしにおいて“日本的要素”が占める割合はまだまだ大きい。

そんなオキナワのオキナワ第一日ボ学校で、2015年から小学校教育隊員として活動した伊波興穂さん。体育や音楽、日本語などの授業への支援と、クラブ活動などの学校行事への協力が主な要請だった。非日系人中心の社会で活動する同期のボリビア隊員たちとは、赴任序盤から状況が大きく違っていたと振り返る。

「ボリビアの多くの派遣先の場合、不慣れなスペイン語で意思疎通を図りながら、手探りで少しずつ身辺の環境を整えて活動に入っていくことが多いと思いますが、当時配属された学校では、何といっても普通に日本語が通じました。僕の場合、日系人会での顔合わせや住居の確認なども早々に済み、金曜日に着任して翌月曜日には普通に担任として授業を始めていたほど。活動に入るハードルはかなり低かったです」

他方で、日系社会ならではの環境に戸惑うこともあった。「情報網がしっかりしているので数百人の日系の方々がほぼ全員、赴任したばかりの僕のことをよく知っているのですが、僕の側から見ると、すぐには誰が誰だか把握できず大変でした。当初、飲み会や外出の誘いには極力行くようにしていたのですが、うっかり同じ人からの誘いを2回断ってしまい、少し気分を害されるという失敗もありました」

活動開始から半年ほどたつと、当初は見えなかった事情も少しずつ垣間見えるようになってきた。

一口に“日系人”といっても、日本生まれで移民として現在の立場を築いた1世の人々、そうした親たちの背中を直接見て育った2世、より世代が下ってボリビア文化の影響が強まっている3世以降の若者や子どもでは価値観が異なる。「さらに、家庭環境の差などによって社会の中でアイデンティティがグラデーション的に変化していて、外部の人間が彼らに接して活動する上ではその見極めが重要です。当人たちも日本文化とボリビア文化の間でアイデンティティの在り方に悩んでいることがわかり、何かできないかと感じました」

日本的な「自律性」や「勤勉さ」を伝えていきたいという思いは1世や2世を中心に多くの日系人が共有していて、日本からやって来た模範として自分の姿が皆から見られている感覚も少なからずあったという。

過去には沖縄県が教員を派遣していたりと、日本からのボランティアが多く活動してきた歴史のあるオキナワでは、隊員への期待値も大きかったと振り返る伊波さん。特に最初の半年ほどは担当する授業のコマ数も業務内容も多く、学外のコミュニティでのイベント運営への参加などさまざまな依頼が集まってしまい、「できること」「できないこと」をきちんと取捨選択して周囲にも伝えることの必要性を痛感したという。

配属先の学校での授業風景。同じ世代の日系人の間でも、日本語能力や日本文化を残している程度はまちまちだった

対策

お悩み解消の3つのポイント

1. 周囲の目線を自分の糧に
2. できないと言うことも大切
3. 部外者の立場をプラスに転じる

周囲から振る舞いを見られていると意識することで、自分の役割を再確認した

日本からやって来たボランティアとして任地へ入ると目立ってしまうのは隊員あるあるだが、日系社会の場合、単に一介の外国人ではなく、「JICAから派遣されて働いている人」という立場をはっきり認知されがちで、過去のボランティアなどと比較される度合いも大きいという。「特に1世・2世の方たちは日本人らしさを大切にしていて、時には服装のTPOなどを注意されることも。ただ、日本から来た僕らを通して子どもたちが日本人像を知り、それが彼らのアイデンティティにも影響を与えていくのだと気づいてからは、自分自身が“教材”なのだという意識をしっかり持つようになりました」。

青年会のメンバーと一緒に行った敬老会の余興

できる限りトライする姿を見せることも大切。つらい時は思い切って伝えた

当初は自分のスキル外の仕事など、さまざまな依頼を何でも引き受けて取り組んでいた伊波さん。「遅くまで居残り作業をしていたので地域の集まりにも不参加になりがちで、いろいろなことがうまく回りませんでした」。半年ほど頑張った後、配属先の人に厳しい状況を伝えたところ、「あれもこれもやってくれてたよね」とねぎらわれ、適度なペースに調整してもらえた。「任地の人たちが僕のことをよく見ていると気づいたのはこの時でした。努力した過程を見てもらうのが大切なので、まずはできる限りトライしてから『できない』と言うほうがよいと思います」。

任地での最終報告会。配属先で初めての協力隊員でもある伊波さんの最後の発表に大勢の人々が集まった

あえて「部外者」という自分の立場を生かし、さまざまな層の考え方を聞き、交流の機会をつくった

日本文化や日本語に対する価値観は世代間で隔たりがあり、しかもお互いにそうした意識の差を確認し合ったり埋めたりする機会が少ないと感じた伊波さんは、それに戸惑う一方、隊員として各世代に接する場があることから、それぞれの思いを仲介できると考えた。「アイデンティティに苦しむ人たちに、リスペクトを持って寄り添いたいと思いました」。その一つの形が、2016年に沖縄で開催された「第6回世界のウチナーンチュ大会」（※）に生徒たちを連れて参加したことだ。「20日間の日本滞在で彼らが多くの経験をできたことはもちろん、地域を挙げて子どもたちを日本へ送る初の試みでもあり、大勢の大人たちの協力で実現しました。日本への思いを皆が再確認する良い機会になったと思います」。

※世界のウチナーンチュ大会…沖縄にルーツを持つ海外在住の日系人が沖縄に集まってネットワークを広げることを目的としたイベント。1990年からおよそ5年に1回のペースで催されている。

日系の大人たちの後押しもあり、17人の子どもたちが世界のウチナーンチュ大会へ。那覇市内でのパレードにも参加した

スキルや意欲で道を開く

就職ストーリー

協力隊で教材作りに興味を持ち教員から教材デザイナーへ転身

Text＝油科真弓　写真提供＝山口哲弘さん

今月の先輩

山口哲弘（やまぐちてつひろ）さん

ラオス／理科教育／
2014年度1次隊・神奈川県出身

就職先　**株式会社BYD**

事業概要　学校向け学習サポート事業として、中学校･高校への出張授業、オンライン授業などを通じて、総合探求学習やキャリア教育を提供している。

山口哲弘さんの略歴

1987年	神奈川県生まれ
2010年3月	大学卒業
2010年4月～13年3月	神奈川県内の私立高校で非常勤講師として勤務
2014年7月	協力隊員としてラオスに赴任
2016年6月	帰国
2016年12月～19年5月	株式会社栄光に勤務
2019年9月～21年3月	三重県内の公立中学校で講師（非常勤含む）として勤務
2021年4月～24年3月	三重県内の公立中学校で教員として勤務
2024年5月～	株式会社BYDに業務委託として勤務

大学時代、社会の役に立ちながら自分の価値観を広げたいと、協力隊に応募した山口哲弘さん。塾講師で経験した理科教育を選んだが、結果は不合格。大学卒業後、理科の非常勤講師として経験を積み、2度目の応募で合格しラオスへ赴任した。

配属先の教員養成短期大学では、主に化学の実験をサポートした。学生から計算が苦手だという相談を受けて数学教室を開いたり、教育実習先に理科実験の道具がそろっていないという話を聞き、身近なものを使った実験方法を紹介するために理科実験クラブを始めたりと、活動を模索していった。また、他の理科教育隊員と協力して実験動画を制作し配信すると、カウンターパートが興味を持ち、一緒に動画を作りアップする活動も始めた。

「授業で行った実験を、教員が動画にまとめて学生に見せることで、学生にとっては復習用のツールとして活用できる上、教員には指導スキルのアップにつながると評価してもらい嬉しかったです」

帰国後は、教師以外の社会経験もしておきたいと、まずは一般企業への就職を決めた。その後、結婚を機に三重県に移住すると中学校の教員となった。

「協力隊時代から教材を考えるのが楽しくなり、勤務していた中学校でも理科新聞や動画を作りました。特に理科新聞の評判がよく、新聞の見せ方やデザインに興味を持ち、ウェブスクールでデザインの勉強も始めました。そのうち、デザインを仕事にしたい気持ちが強くなっていきました」

配属先の教員養成短大の学生たちに理科実験の方法を指導する山口さん

そして生徒が卒業するタイミングで転職を決めたが、70社以上にエントリーしても半分以上は返事すら来なかった。正社員での採用は厳しいと考え、業務委託を募集している会社も探した。そこで見つけたのが、出張講座の教材のデザイナーを募集していた株式会社BYDだった。

「元教員で、かつデザインをしたい自分のための仕事だと思いました。業務委託で週2～3日勤務という条件でしたが、それでも構わないと応募したところ、結果的に週5日で働くことになりました」

現在は東京に単身赴任中で、月1回、三重県に帰る生活をしている山口さん。

「将来は起業をしたいという夢があります。教育とデザインをかけ合わせて自分に何ができるのか考えながら、将来につなげていきたいと思っています」

1 株式会社栄光　2016年12月～19年5月

協力隊で多彩な経歴を持つ仲間に刺激を受け、帰国後は一般企業への就職を目指して転職エージェントに登録しました。幅広い業種の企業を紹介されましたが、私のキャリアを高く評価してくれたことから、株式会社栄光に入社しました。同社では小学生向け理科実験教室の室長として、運営を担当すると共に講師も務めました。

2 公立中学校　2019年9月～24年3月

臨時講師として三重県の公立中学校で働くことになりました。その後、三重県の教員採用試験に合格し、2021年4月からは別の公立中学校に正規教員として勤務。コロナ禍で対面授業が減った時は、協力隊の経験を生かして理科実験の動画を作って生徒に見せたり、授業で伝え切れないことを理科新聞にして配ったりしました。

3 転職活動　2023年10月～

転職活動で求人サイトの「Wantedly」を利用しました。特に力を入れたのはプロフィール欄の作成で、自分の実績をできるだけ数値化、具体化するように意識しました。当時36歳でデザインという未経験分野に転職するのは難しいと思っていました。しかもデザイン関係の求人は通勤圏内だと選択肢が少なく、東京などの都市部に多くの求人があったため、将来的には三重県に戻りリモートができる会社に、11月くらいからエントリーしていきました。

4 面談　2024年4月

株式会社BYDからエントリーの翌日に返事が届き、数日後に人事担当の方とオンラインでカジュアル面談、その1週間後にオンラインで社長面談を受けました。これまでのキャリアのほか、転職の経緯や理由について聞かれました。社長面談では、教材やチラシなどを例に、「こういうデザインはできるか」など、私ができることも確認されました。

採用決定　2024年4月

現在の仕事

弊社では学校の要望に応じ、中学校・高校などに出前講座をしています。私の担当は、主に出前講座の教材作りです。どうしたら生徒が見やすく、楽しめるのかを考えながら、デザインやコンテンツを考えています。教材作りだけでなく、講師やアシスタントとして学校に行って教えることもあります。学校との打ち合わせもありますが、学校現場や教員の考え方を知っていることは、元教員の私の強みでもあると考えています。他に、CSRの一環として学校向けに授業を行いたい企業に対し、授業作りのコンサルティングも手がけています。

東京で行われた教育分野の展示会にブースを出展した株式会社BYDのスタッフの方々

後輩へメッセージ

私自身がそうでしたが、協力隊でいろいろな出会いを経験すると自分の可能性が広がったように感じ、帰国後にやりたいことがたくさん出てきます。でも、実際は、自分が思い描いたとおりにいかないことが多々あります。そんな時は焦って決めるのではなく、いったん落ち着いて、自分を見つめ直す時間をつくるのも大切でしょう。就職してから〝違う〟と感じたら転職できる時代だと思いますが、ただ、そこでスキルや経験を自分のものにして、次につなげていくことが大切だと感じています。

JICA海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

未経験から飛び込んだ林業界
地域の山林を守り、人のつながりを広げていきたい

派遣から始まる未来
先輩たちの社会還元

フリーランスの林業家として
地域の森林管理に貢献

上村（うえむら） 岳（がく）さん
ボリビア／青少年活動／2015年度3次隊・熊本県出身

Text＝新海美保　写真提供＝上村 岳さん

全国有数の林業県、熊本でフリーランスの林業家として働く上村 岳さん。熊本市から車で約30分、豊かな自然に恵まれた御船町を拠点に連日山へ入り、植樹や木々の手入れにいそしんでいる。

出身は熊本県熊本市。県内の大学で社会福祉学を学び、卒業後はリハビリテーション病院の医療事務の仕事を経て、知人の誘いで教育系のNPOに転職。子どもたちの自然体験学習のサポートなどに携わった。

上村さんが国際協力に関心を持ったのは大学3年生の時。紛争で傷ついた子どもを支援するドイツ国際平和村の活動を知り、自分にも何かできないかと教授に相談すると「協力隊がある」と教えられ、在学中に応募した。当時は不合格だったが、NPOで子どもたちと接する中でかつての思いが再燃し、15年越しに再挑戦。合格してボリビアの主要都市の一つ、サンタクルス市に派遣された。

米国系NGOが運営する公民館施設の学童保育に従事し、学校帰りに来所する子どもたちの宿題を見たりパソコンやレクリエーション・スポーツを教えるなど、人手不足の施設を支えた上村さん。館内は当初ごみだらけで、ごみを拾ったり廃材で工作をしたり、モノを大切にする心を伝えようと努めた。

他方、赴任直後の2016年4月、「平成28年熊本地震」が発生。甚大な被害が出る中、上村さんは故郷を心配しながら「任期終了後は熊本の復興に携わろう」と決めた。帰国後すぐに受けた熊本市役所の採用試験は準備期間が足りずに不合格だったが、「復興に関わる場は役所だけではないはず」と目先を変えた19年、ちょうど熊本県で「くまもと林業大学校」が開校した。

都道府県の条例で設置される林業大学校は、林業の人手不足を背景に、全国各地で開校されている。「自然体験学習などの経験から1次産業への関心もあり、その時期の開校を運命のように感じました」と上村さん。

山林は、木材を生産するだけでなく、豊かな水を蓄え、山崩れなどを防ぎ、地域の暮らしを守る重要な役割を果たす。熊本地震でも県内の野山に被害が出ていた上、当時相次いでいた水害の原因として山の整備不足も指摘されており、上村さんは「林業の担い手になることで、熊本の復興に貢献しよう」と考えた。くまもと林業大学校の第1期生として入学し、1年間でチェーンソーの操作や作業車両の運転、森林調査の方法など基礎から専門的な技術までしっかり学んだ。

そして在学中、地域で「自伐型林業」に取り組む“師匠”にも出会えた。自伐型林業とは個人レベルの小規模経営による林業の形態で、対象区画の木をすべて切らず、適切に間引く「間伐」で残った木の生育を促して林業を続ける手法だ。大型の機材も太い林道も用いず、林業での採算性と環境保全を両立させる考え方である。林業大学校の卒業を控え「師匠の下で働きたい」と願い出た上村さんだったが、「働き方がいろいろある時代、自分一人で挑戦してはどうか」という師匠の言葉に、現在の道を選んだ。

主な仕事は、山主や森林組合などからの委託で植林や下草刈りを行う「造林」。最初は森林組合などに営業をかけて、小さな仕事から始めた。「自分が植林した場所は、翌年以降に草刈りなどの管理を任せてもらえることが多いです。しっかり仕事をこなして信頼を積み重ね、やっと仕事が増えて生活が安定してきました」。

山での作業は危険もあり、最近は同じ林業大学校を出たフリーの林業家たちと組んで活動している。隊員時代から心がけてきた“人とのつながりを重んじる”姿勢の下、新しい道を着実に切り開いてきた上村さん。「まだまだこれからですが、植林した苗が育っている姿を見ると山を育てている実感が湧きます」と語る。

現在は仕事の傍ら、OVとして出前講座で話したり、徳島県でのサマーキャンプに参加するなど、子どもたちと関わる取り組みも続けている。「私の仕事に興味を持ってもらえれば、後継者不足が続く林業界のためにも、子どもたちの情操教育のためにもなるはずです」。

今後は林業に携わる各地のOVたちとつながり、地域ごとの課題などを共有して新たな活動のアイデアも模索したい考えだ。青少年活動、協力隊、林業と、経験を生かしながら、上村さんの展望はさらに広がっている。

1 隊員時代、配属先で図工などの創作活動の指導にあたる上村さん 2 下草刈りの様子。主として、春には植林、夏にかけて草刈り、秋から翌春にかけて間伐や植林の仕事がある 3 徳島県青年海外協力協会が主催するサマーキャンプ。震災被害のあった福島県と熊本県の高校生を集めた交流イベントで、上村さんも2023年から引率者として参加している

上村さんの歩み

2002年　大学卒業後、地元のリハビリ病院に勤務

医療事務の仕事に従事し、診療情報管理士の資格を取得しました

2007年　教育系NPOの立ち上げに参画

行政の指定管理者制度で、キャンプ施設の運営管理のため山間で働いたりもして、今の仕事につながっています

2012年　NPOの業務で熊本県立あしきた青少年の家に勤務

県内の子どもたちの自然体験学習を支援する中で、改めて『海外の子どもたちに関わりたい』と思い、協力隊に再チャレンジしました

2016年　協力隊員としてボリビアへ

当初はスペイン語の習得に苦労し、配属先では一人でごみ拾いをすることから始めました。ごみをごみ箱に捨てる習慣もなかった子どもたちが少しずつ変わっていきました

2019年　くまもと林業大学校へ入学。翌年、フリーの林業家に

ボリビアで大規模な伐採の現場を目にして心を痛めたことも林業へ進むきっかけになりました。卒業後は林業事業団体などへの就職も考えましたが、フリーに。師匠のつながりや営業で得た仕事を続けながら少しずつ信頼を得られるようになりました

2024年　能登半島地震の被災地でボランティア活動

2月に10日間ほど支援に入りました。自分で調節して時間の都合をつけやすいのは、フリーで働くことの利点ですね

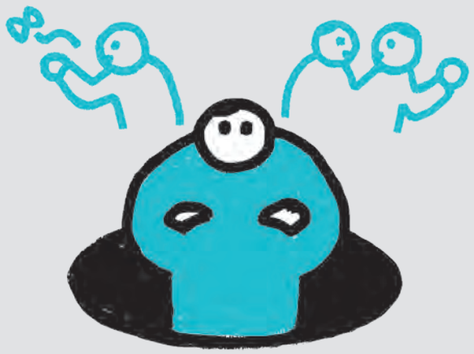
お悩み相談
アドバイスを聞きました！

今月のお悩み

現地の生徒も教員も言うことを聞いてくれず派遣期間内に成果を上げられるか不安です

（アフリカ／体育）

体育隊員として小学校に赴任して約１年がたちます。生徒たちに体育の楽しさを教えながら、運動能力をつけさせること、同僚の教員には指導法を伝えることを活動目標に設定しました。ところが、生徒たちは体育の授業を自由時間と思っていて、勝手にボール遊びを始める子もいます。教員も、生徒に指導せずおしゃべりしていたり、授業を私に任せてどこかに行ってしまったりします。これでは学校のカリキュラムに沿った年間計画が達成できず、私が立てた活動目標を残りの任期で成し遂げる自信がありません。



徳永先生からのアドバイス

現地の方々との“時間軸”の違いを理解して2年間で成果を上げようと焦らないことが大事

私の教え子で隊員として行った人からも、「現地の人がなかなか行動を変えてくれず思うように活動が進まない」という相談を受けることがあります。現地の方々と理解し合うためには、相手の視点で物事を見ることが必要だと思います。

大きな視点の違いとしては“時間軸”があります。現地の方々は、その地域の習慣や文化の中で何十年も生きてきて、今後も生活が続いていくでしょう。一方、隊員には２年間という期限がある。そのため、「任期中に活動を完結して成果を上げる」という時間軸で考えがちです。隊員は、報告会や隊員同士の会合、首都などでの健康診断や各種手続き…と結構忙しく、のんびりしている場合ではない。なのに現地の方々は行動が遅い、と焦るのもわかります。

それでも成果にとらわれて焦らないよう心がけることが大事です。例えば私がコンサルタントとして海外で仕事をする場合、短ければ２週間、長くても数カ月程度の滞在でプロとしての結果を出さなくてはなりません。でも、隊員はその点、もっと自由に考えてほしいです。配属先によっては、前任の隊員がいて、自分が帰国した後も後任がいる場合もあり、自分は協力隊活動の長い流れの中の一部と考えることもできます。そうでない場合でも、現地の方々が、隊員の帰国後も続けられるような種をまいておくという考え方もよいでしょう。

かく言う私も隊員時代は成果を上げようと一生懸命でした。タンザニアで大きな道路を建設するプロジェクトの一環で、資機材管理部門に関わったのですが、元々必要な材料の入手が困難な上、手に入れた物の管理方法が定着していない。さらにアフリカの人々はのんびりした人が多い傾向がある。資機材の乏しさとアフリカ人気質を考えると難しい仕事でした。でも、もし優れた資材管理の手法を伝えられれば今後も引き継がれるはずだと思い、活動に取り組みました。

隊員は成果を求めて短距離走の選手のように突っ走りがちですが、現地の方々はマラソンのような持久走でゆっくり走っています。いつかは両者のリズム感がぴったり合い、心地よく共に走れるよう、まずはお互いの信頼関係を築くことが大切です。

今月の先生

徳永達己（とくながたつみ）さん
タンザニア／在庫管理／1985年度1次隊・神奈川県出身

拓殖大学商学部卒、東京海洋大学大学院修了。協力隊に参加した後、（株）エイト日本技術開発所属の開発コンサルタントとして社会基盤整備に関する国際協力プロジェクトに携わる。2015年より拓殖大学国際学部教授、20年より学部長。教え子と共に山梨県富士川町におけるまちづくり活動も進める。

Text＝三澤一孔　Photo＝阿部純一（本誌）

INFORMATION
JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

RECRUIT

JICA海外協力隊の2024年秋募集を実施

JICA海外協力隊（長期派遣）の2024年秋募集を2024年10月1日～10月31日で実施します。9月2日からJICA海外協力隊ウェブサイトにて募集要項を公開しており、マイページ登録も受け付け中です。

また、JICA海外協力隊のLINE公式アカウントでは、最新の情報が閲覧できるほか、協力隊応募に関するお悩みやご質問にAIが回答する「教えて！FAQ」、お薦めの職種をピックアップする「シゴト診断」などの各種コンテンツが利用できますので、応募をご検討中の方にぜひお知らせください。多くの方のご応募をお待ちしております。

https://www.jica.go.jp/volunteer

NEWS

『クロスロード』がリニューアルされました！

本誌『クロスロード』を今号からリニューアルしました。PDF版がスマートフォンやタブレット、パソコンで読みやすいよう、冊子の全ページを横書き誌面に変更し、従来は一部の記事のみをピックアップしていたJICAウェブサイトでもすべての記事が閲覧できるようになります。読者アンケートなどを通じて隊員の皆さんがどのような情報を必要としているかを探り、活動に役立つヒントやアイデアを中心に、就職や社会還元も含めた帰国後の道筋も、より充実した誌面でお届けして参ります。これからも誌面を通じて協力隊活動をサポートしていきますので、今後ともご愛読ください。

EVENT

帰国隊員に外務大臣が感謝状授与

7月23日、外務省飯倉公館（東京都港区）で、外務大臣感謝状授与式が開催され、任期を終えて帰国した協力隊員58名が出席しました。主催の外務省からは上川陽子外務大臣が出席され、大臣自ら帰国隊員一人ひとりに感謝状を手渡されました。来賓として、JICAボランティア事業を応援する国会議員や現職参加した帰国隊員の所属先代表者も出席されました。

授与式に続き、懇談会では、冒頭、小渕優子衆議院議員・JICA議連（日本の国際協力～特に青年海外協力隊の活動～を支援する国会議員の会）会長から、コロナ禍の影響で一時帰国や派遣延期などがあったにもかかわらず、志をもって協力隊員としての任期・活動を全うしたことへの慰労と、帰国後の活躍への期待の言葉と乾杯の発声を頂き、派遣先国での生活・活動の報告、帰国後の展望など、活発な意見交換・交流が行われました。

外務大臣感謝状授与式の様子（写真提供：日本国外務省）

編集後記

リニューアル後初の今号では、従来の「JICA Volunteers' Reports」や「みんなの教材づくり＆アクティビティ」がカットになっていますが、11月号からイメージを刷新して復活しますのでお楽しみに！リニューアルに伴うバタバタの中、取材にご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。（飯渕一樹）

『クロスロード』は2011年5月から「JICAボランティア向け実践ガイド」と銘打たれました。ところで毎号、読者の皆様からのご意見・ご感想、アイデアを募集しているのをご存じですか？ 右のご案内からぜひ声をお寄せください。より「実践的」な誌面を目指してまいります。（阿部純一）

クロスロード
［2024年10月号］ 第60巻第9号　通巻701号
発行日：2024（令和6）年10月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル２階
デザイン：亀井敏夫
印刷・製本：弘報印刷（株）　校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

あの日、地球の、あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

スーダンの茶店は慣れが大切！

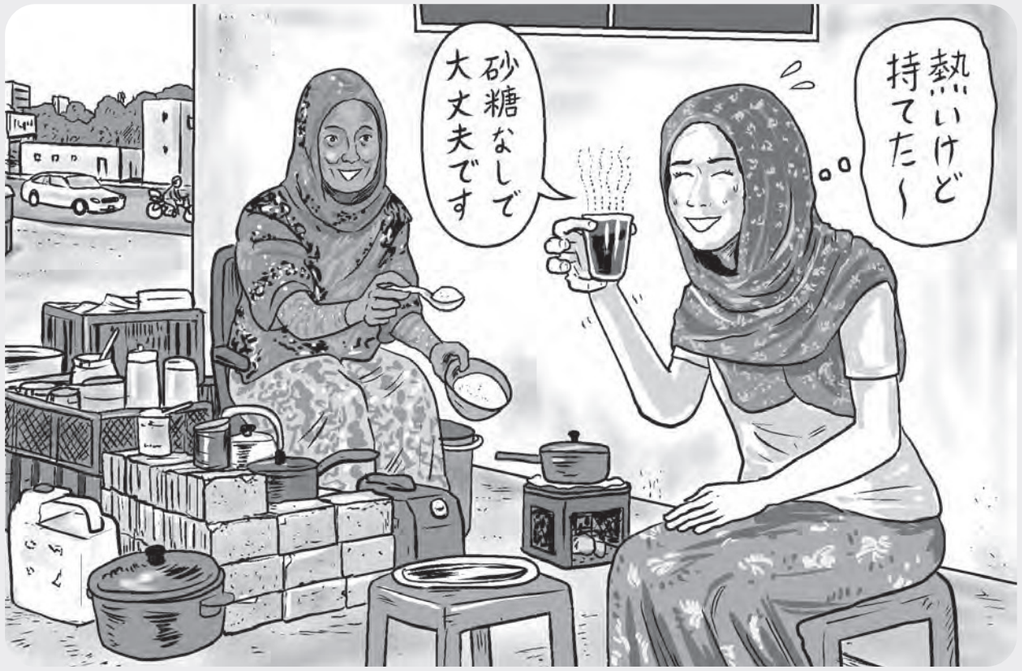
高木晴乃（旧姓 吉田）さん
スーダン／環境教育／2016年度4次隊・神奈川県出身

私が活動したスーダンは敬虔なムスリムが国民の大半を占める国です。特に当時はアルコール飲料が法律で禁止されていたほどで、人々が嗜好品として飲むのは、どこへ行ってもお茶やコーヒーでした。

活動先の事務所へ行けばみんなでお茶などを片手に長時間のおしゃべりに興じるのが日常でしたし、特に印象的なのが、道端に「シッタ・シャーイ」と呼ばれる簡易的な茶店がよく出ていたことで、私もしばしば、人との待ち合わせで時間が空いた時などに利用していました。

アラビア語で「シッタ」が女性、「シャーイ」が紅茶という意味で、その名のとおりお湯を沸かす鍋釜や椅子などを並べた真ん中におばちゃんが座っていて、ミルクティーやミントティー、コーヒーなど注文に応じてサッと入れてくれます。ただ、持ち手のないガラスのコップになみなみと注いで渡されるので、最初は「熱い、熱い！」と慌てました。慣れてくると、親指と人差し指でコップの縁を持ち、底面に小指を添える三点支持で飲めるようになるのですが（笑）。

そして、何より要注意だったのが砂糖の量！スーダンの人たちは大の甘党で、お店でも黙っていると何でも激甘にされてしまいます。そんな現地事情を訓練中から耳にしていた私は、「ビドゥン・スッカル（砂糖なし）」などの表現を特に念入りに覚えて赴任。シッタ・シャーイでも市場のジュース屋さんでも、スプーン山盛りの砂糖をジャンジャン入れようとするスーダン人との攻防を繰り広げた思い出があります。



Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

任地の食生活に彩りを！

隊員めし

今月の料理

素朴な甘味の伝統的なスイーツ

テレドウ

From Palau

教える人

伊藤洋美さん
ボツワナ／デザイン／2014年度1次隊、パラオ／デザイン／2017年度9次隊・東京都出身

大学を卒業後、広告制作会社でグラフィックデザイナーとして約9年間勤務。グラフィックデザインでも途上国に貢献できることを知り、協力隊に参加。ボツワナで展示や広報関係の活動を行った。パラオでは国際珊瑚礁センターに派遣され、生態系の展示デザインなどに携わった。任期終了後、同センター長に誘われて正規スタッフとなり、現在、パラオ在住。

パラオでは写真のような専用の道具で生のココナッツを細かく削って売っている。現地のテレドウはこれを混ぜて作る

タロイモにはいろいろな色があり、現地のテレドウは黄色いタロイモ（パラオ語で「ブラク」と言う）で作られている

テレドウの材料（6〜7個分）

タロイモ（サツマイモでもよい）…… 1個（500g程度）
ココナッツロング（※）……100g
ココナッツミルクまたは牛乳、煮沸したお湯 …… 適量

テレドウのレシピ

1. タロイモの皮をむき5センチ角くらいに切り、鍋でゆでる。スプーンなどで押すと潰れるくらいやわらかくする。目安として沸騰してから6〜7分くらい。
2. ゆで上がったらお湯を捨て、イモを鍋に戻し、すりこぎ棒やお玉の背などでマッシュポテト状につぶす。パサパサしている場合は、ココナッツミルクや牛乳、煮沸したお湯を少しずつ混ぜてまとめやすくさせる。
3. つぶしたイモにココナッツロングを混ぜる。量は2つかみ程度を目安に、味見をしながら好みの甘さになるように調節する。
4. ラップを敷いて、その上に直径3センチ・長さ15センチくらいの大きさになるようにイモをのせ、ラップごと丸めて手でにぎりながら形を整える。ラップをはがして完成。

キュウリのツケモノの材料（1人分）

キュウリ …… 1本
★豆板醤（トウバンジャン）……小さじ1/2〜1
★チキンスープの素 ……小さじ1/2
★すりごま …… 小さじ1
★にんにくすりおろし ……小さじ1/2
★ごま油……大さじ1

キュウリのツケモノのレシピ

1. キュウリを少しずつ回転させながら、瓶やすりこぎ棒、包丁の持ち手などでたたく。縦に割れるので、割れたら食べやすい大きさに手でちぎる。上下のヘタの部分は捨てる。
2. ①をボールなどに入れ、★の調味料と和えて完成。

※ココナッツロング…ココナッツの果実を細長く削って乾燥させたもの。パラオでは生のココナッツを削って使う。日本ではお菓子の材料として売られている。

＼ 料理について ／

タロイモはパラオの主食であり、食物繊維やビタミン豊富な栄養価の高い食物です。イモ類がよく育つのは南の島の恩恵ですね。テレドウは私のホームステイ先のホストマザーがよく作ります。キュウリもツケモノもパラオ語になった日本語で、キュウリのツケモノはイベントや冠婚葬祭でよく出てきます。日本製のキムチの素と和えることが多いのですが、他の国でも作れるよう、豆板醤などでアレンジしてみました。包丁で切らずにたたくことがコツです。

レシピ・写真提供＝伊藤洋美さん　Text・再現料理・Photo（再現料理）＝阿部純一（本誌）

公開！

私の派遣国生活

〔エクアドル〕

Text＝阿部純一（本誌）　写真提供＝鈴木善之さん

鈴木善之（すずき よしゆき）さん
マーケティング／
2022年度7次隊・茨城県出身

首都から約180キロ離れたパタテ市役所に赴任して、主に農業生産者の市場競争力強化を目指して活動しています。パタテはミカンやモモ、トウモロコシなど、さまざまな果物や野菜の産地ですが、生産者たちは従来の栽培技術や販売方法にとどまっていて、厳しさを増す市場競争についていくことが難しくなってきています。今、私が力を入れているのが、「生産物のID カード」の導入です。大きめのカードに、生産物の種類と生産者の名前・顔写真、農場名や栽培地域、収穫日を掲載し、さらに詳しい情報もQRコードから見ることができる仕組みです。これを商品の袋やパッケージに貼りつけることで、お客さんからの信用を得て、安心して食べてもらえるようにしたいのです。生産者にもIT活用を通じて商習慣を見直す機会にしてほしいと思っています。支援している方と町で会うと遠くからでも手を振ってくれたり、収穫した果物を分けてくれたりするので、自分の活動を喜んでくれているのだと嬉しく思います。

活動の様子

パタテを果物の産地としてPRするため、鈴木さんが昨年開催した地元産ジャムのコンクール。「市長に企画を提案したところ、『すぐに実行するように』との指示を受け、急いで準備しました。好評だったので、今年も開催の準備を進めています」

暮らしている市、町、村

鈴木さんの住まいの屋上からパタテ市街を望む

パタテはアンデス山脈を構成するトゥングラワ火山の麓で、年中温暖な気候です。半径500メートルほどの小さな町のため、ほとんどの住民同士が知り合いで、あちこちで挨拶が飛び交っています。私は交流を広げるため、知らない人でもなるべく挨拶するようにしていて、出歩くとたいてい何回かは「スズキ、元気かい?」と声をかけてくれます。農家の中庭に洗い場がある風景や、屋外のかまどで料理をしている様子は、私が幼かった頃の 60 年前の日本に似ているところもあると思います。

ほとんどの農家の裏庭に洗い場がある

食べ物

「エンセボジャード」というツナが入ったタマネギベースのスープや、「カルド･デ･31」という家畜の内臓を煮込んだスープが定番で、私も週に1、2回は食べています。実は現地の医師から昼食をきちんと取るように指導されたので、昼は職場近くのレストランで肉料理とスープのセットを食べています。自炊もしていて、最近は地元の料理をまねて牛や豚の骨つき肉と野菜を煮込んだスープなどを作っています。

鈴木さんは栄養バランスを考えて朝食は野菜中心に取っている

新鮮な地元産の野菜や果物が並ぶパタテの市場

住まい

建物は大家さんの家に隣接した平屋で、共有の中庭があります。間取りはワンルームで、キッチンとシャワー、トイレがあります。冷蔵庫は元々設置されていて、電子レンジとミキサーは購入しました。パタテは果物が豊富でジュースにして飲む習慣があり、私もミキサーでジュースを作っています。大家さんから畑で採れたミカンやアボカドのほか、トウモロコシやジャガイモ、軽食の差し入れを頂くことがあります。私もお礼に自分で作った豚の角煮などの料理をあげたりしています。

中庭にはテントや椅子があり、そこで食事や読書をすることも。大家さんが飼っているイヌとネコとも仲良し

クロスロード 2024年10月号
2024年10月1日発行（毎月1回1日発行）第60巻第9号 通巻701号　編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局　〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

ジャイカ JICA
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
VEGETABLE OIL INK
FSC ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722